

「魂としての人間」

マタイによる福音書10章26節—31節

- 1、「体を殺しても、魂を殺すことのできない子どもを恐れるな」(マタイ10:8)は諺のように、当時の教会で用いられていた。迫害の状況の中で、伝道者が殉教をも恐れずに一層伝道に励むようにとの勧めである。事実マタイの32節、40節では迫害の状況が語られている。研究者はマタイとルカに並行するイエスの言葉から『イエス語録集』(学名でQ [quelle 独])を想定する。それによればこの言葉は必ずしも迫害の状況だけではなく、もっと一般的に人間への理解のために言われたかもしれない。マタイもルカも「魂」(プシュケー)は①自然的生命、②感情、愛情などの起こるところ、③自由に決断する主体としての人間自身。関係存在としての人間。などの意味を含む。③は創世記2章7節の、土の塵である人が神の息により生ける存在になったという神学的同察を含む。マタイもこの意味を含めて用いている。
- 2、「健全なる精神は健全なる身体に宿る」(ローマの詩人ユベナリスの言葉)は人間のバランスから、二分法で人間をみる。だが、パウロは人間を「霊と心と体」(第一テサロニケ5:23)と三分法で考えている。現代でもYMCAは三角形の標識を用いて「Mind(心) Spirit(霊) Body(体)」で人間をあらわす。霊とは何か。フランス文学者の田辺保氏はこのパウロの霊を「エスプリ」という語で語り、「そこから、ふと、より高次の意外な『何か』を暗示しうるセンスだといえれば幾分近いのではないだろうか」といっている。『何か』を「神」と言ってしまうまでだが、単に人間の側の心や精神の豊かさと言ってしまうので、関係を察知するセンスだと言ふところにふくみがある。「霊」は神学的に表現すれば「神から賜う関係(聖霊)」であることに違いはない。ここはしかと押さえておかねばならない。だが、しかしそれを感知する人間のセンスの問題にまで引き寄せてい「霊」を考えるとところに文学者らしさがある。「魂」はそのセンスを宿した人間を現わしている。そのセンスが人間と人間とを結びつけるとき、「心」や「体」の違いにも関わらず、「霊」によって結ばれた関係が生まれ「交わり」が生じる。霊は聖書では風とも訳されている。(ヨハネ3:8)。風を感じる感性を含めて、自由をまとう魂としての人間への自覚を促す。
- 3、土井敏邦監督の作品映画『沈黙を破る』を見た(日本キリスト教婦人矯風会主催)。パレスチナ占領の残虐を兵役で体験したイスラエルの青年たちが「沈黙を破る」というNGOを立ちあげて、政府の弾圧にも屈せずヘブロンでの残虐の事実を示す写真展を開き、占領の現実とイスラエルの腐爛を含めての悲惨を語る。それは単なる「反戦」の運動ではない。半世紀を超えて苦難を受けてきたパレスチナ人の魂にも触れる。過去の戦争加害責任を忘却し、かつパレスチナへの加害責任をも自覚しない日本人の心にも触れあう。監督は17年かけてこの映画をつくった。魂が人間をつなぐ。